

平成30年度 資源評価調査報告書（資源動向調査）

都道府県名	青森県	担当機関名	(地独)青森県産業技術センター 水産総合研究所
種名	ウスメバル	対象水域	青森県

1. 調査の概要

青森県全域の月別、漁業種類別、銘柄別漁獲量の集計

2. 漁業の概要

青森県のウスメバル漁は、周年一本釣りで漁獲される他、4～6月に太平洋側の底建網、6～8月に日本海側の刺網で漁獲される。平成30年の漁法別漁獲割合は、一本釣り50%、刺網25%、底建網17%、その他8%であった。

3. 生物学的特性

本海域におけるウスメバルの知見については「メバル類の資源生態の解明と管理技術開発」（2001年）に詳しく記載されており、主な生物学的特性は以下のとおりである。

- ・ 寿命：10年以上
- ・ 成熟：3歳以上（主体は4歳以上）
- ・ 産仔期、産仔場：交尾は青森県及び秋田県で12月、山形県及び新潟県で12～1月、産仔は青森県及び秋田県で3～5月、山形県で2～4月、新潟県で2～3月。
- ・ 分布：日本海では石狩湾から対馬海峡まで、太平洋では函館から銚子まで。
- ・ 生態：仔魚期は産出から体長16mm前後まで表層で生活し、稚魚期には流れ藻に随伴し体長35mm前後で底生生活へ移行。1～3歳魚は青森県では水深50～70m付近に、佐渡島では60～80m付近に分布。主な餌生物は仔稚魚期、1歳魚ではかいあし類、2歳魚でかいあし類、ヤムシ類、3歳魚でかいあし類、ヤムシ類、端脚類、オキアミ類、4歳魚以上でオキアミ類。
- ・ 成長（尾叉長）：1歳で8cm、2歳で13cm、3歳で17cm、4歳で21cm、5歳で23cm、6歳で25cm、7歳で26cm（青森県～京都府の平均、雌雄とも同じ）

4. 資源状態

青森県全域の漁獲量は、1978年の1,045トンピークに1988年の197トンまで減少、1995年～2011年に375トン～646トンの範囲で横ばい、その後2014年の185トンまで減少し、2017年に増加に転じ、2018年は475トンであった（図1）。

資源水準については、長期間データを有する漁獲量を判断材料とし、その最高値と最低値との間を3等分し、上から高位、中位、低位とすると、平成30年の資源水準は中位であった。

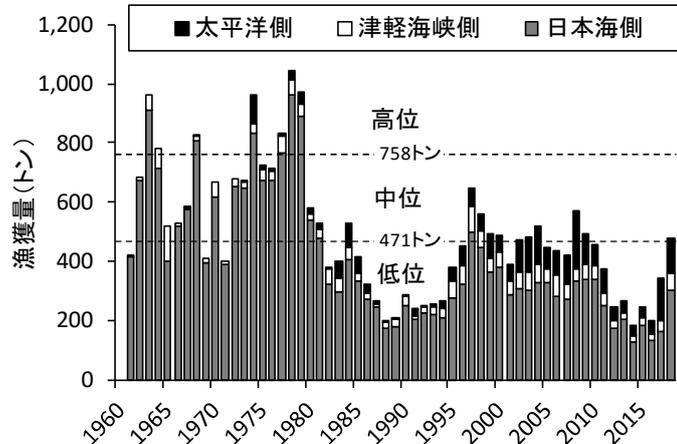


図1 青森県におけるウスメバル漁獲量の推移

資源動向については、コホート解析により推定した資源量の直近5年間の傾きから増加と判断した(図2)。

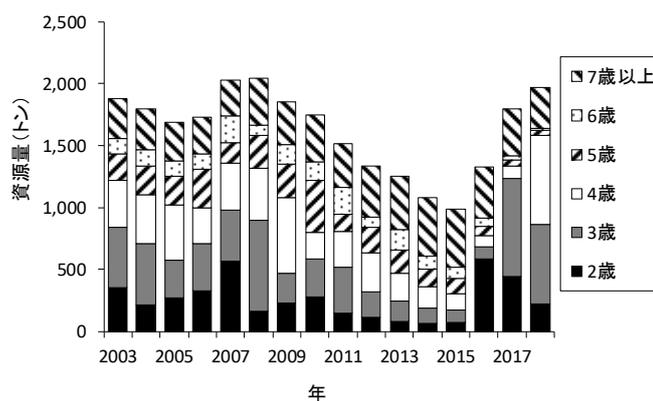


図2 青森県におけるウスメバル資源量の推移

5. 資源回復に関するコメント

青森県：資源回復計画(2007年3月青森県)において、小型魚の荷受け制限、休漁日を定め実施し、2011年以降は青森県資源管理指針で継続実施している。

平成30年度 資源評価調査報告書（資源動向調査）

都道府県名	秋田県	担当機関名	秋田県水産振興センター
種名	ウスメバル	対象水域	秋田県沿岸

1. 調査の概要

- ・ 月別、漁業種類別漁獲量の集計
- ・ 市場での銘柄別漁獲量の集計

2. 漁業の概要

2018年（H30年）の漁獲量は141トンであり、前年に比べ76トン増加した。漁業種類別漁獲割合は、さし網が49%、釣りが43%で、これらで92%を占めた。主漁期は釣り、さし網とも2～7月と比較的長い。最盛期はさし網が2、3月、釣りは5、6月である。地区別では県北部が76%、次いで県南部が14%を占めた。

3. 生物学的特性

日本海北部海域におけるウスメバルの生態については「メバル類の資源生態の解明と管理技術開発」（2001）に詳しく記載されている。

- ・ 寿命：10年以上、成熟：3歳以上、交尾期：12月 産仔期：3～5月
- ・ 分布：石狩湾～対馬海峡、函館～銚子
- ・ 浮遊期：～BL1.6cm、流れ藻随伴期：～BL3.5cm、底生移行期：BL3.5cm～
- ・ 成長（BL）1歳8cm、以降13cm、17cm、21cm、23cm、25cm

4. 資源状態

近年の漁獲量は2008年をピークに減少傾向にあったが、2018年は前年の2倍強の141トンに増加した。2013年以降のCPUEは2018年を除き同程度であり、資源状態は安定している。

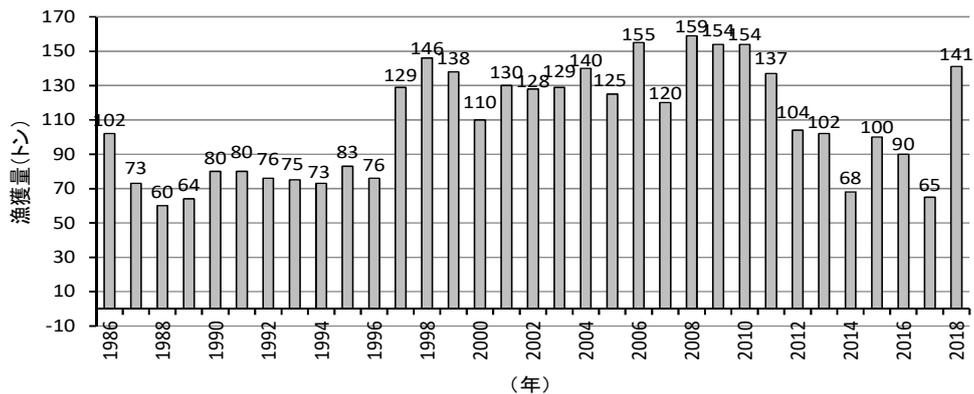


図 ウスメバル漁獲量の推移

5. 資源回復に関するコメント

秋田県漁協北部総括支所管内での銘柄別漁獲割合（重量）をみると、近年、さし網では中銘柄以上の大型魚の割合が高まっており、現状の目合制限を継続する必要がある。しかし、釣りでは小型魚の漁獲割合が増加傾向にあるため、年級群で豊度の差が考えられ、小型魚の保護について検討を要する。

平成30年度 資源評価調査報告書（資源動向調査）

都道府県名	山形県	担当機関名	山形県水産試験場
種名	ウスメバル	対象水域	北部日本海のうち山形県沖

1. 調査の概要

漁業種類別に漁獲量を取りまとめ、漁獲の変動を把握した。

2. 漁業の概要

近年では51トン（2009年）を漁獲した2009年の漁獲量が最も多く、それ以後、減少傾向にある。2018年の漁獲量14.2トンの内訳は、飛島地区を中心に4、5、9月に主漁期となるさし網が4.8トン（34%）、一本釣りが4.0トン（28%）、底びき網が3.7トン（26%）、はえなわが1.5トン（10%）となった。漁獲量の減少はさし網で顕著であり、全体に占める割合は直近3年（2016～2018）はその前の3年（2013～2015）より24ポイント減少しており、漁業者の減少による影響が大きいと考えられる。

3. 生物学的特性

胎生、仔魚産出期；3～4月、分布海域；水深70～200mの岩礁域、寿命；10年以上

4. 資源状態

漁獲量は急増（1996、2005、2009年）とその後の漸減といったパターンが繰り返されている。2018年は14トンと引き続き低調な漁獲となった。

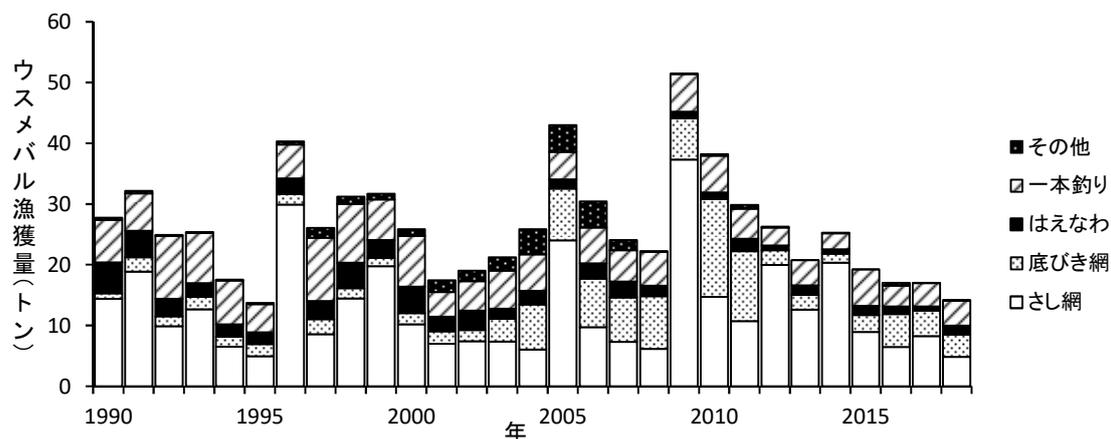


図1 山形県におけるウスメバルの漁業種類別漁獲量の推移

5. 資源回復に関するコメント

漁獲量は直近3年（2016～2018）とその前の3年（2013～2015）を比較すると、さし網は減少したが、さし網以外の漁業はさほど変わっていない。漁獲量の減少は主にさし網漁業者の減少によるものと考えられた。

平成30年度 資源評価調査報告書（資源動向調査）

道府県名	新潟県	担当機関名	新潟県水産海洋研究所
種名	ウスメバル	対象水域	新潟県沿岸

1. 調査の概要

- 市場における漁獲物体長組成の把握及び生物測定調査
- 月別漁業種類別漁獲量の集計

2. 漁業の概要

2017年の県全体の漁獲量は178トン、2018年の越後側主要4地区の漁獲量及び佐渡市場取扱量の合計は100トン（前年比98%）であった。

漁業種類別では刺網が8割以上を占めている。主漁期は2～7月であり、特に3～6月が多い。地区別の漁獲状況は、佐渡が全体の7割、越後側が3割を占めている。

3. 生物学的特性

寿命：9年以上

成熟開始年齢：3歳～（主体は4歳～）

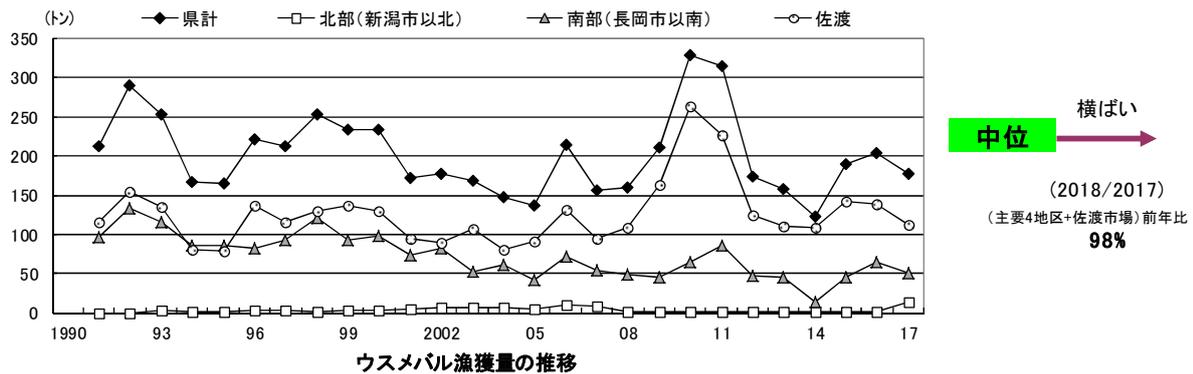
産仔期：新潟県では2～3月に稚魚を産仔する。産仔場は不明。

索餌期・索餌場：～35mm＝浮遊・流れ藻随伴，35mm～＝底生生活，
1-2歳＝60-80m深，3歳～＝80-150m深（佐渡島沿岸）

年齢・成長：1歳＝8cm、2歳＝13cm、3歳＝18cm、4歳＝21cm、
5歳＝23cm、6歳＝25cm、7歳＝26cm（FL）

4. 資源状態

- 県全体の漁獲量は2001年以降150～200トン前後で推移していたが、2010～11年は300トンを超えて大きく増加した。この漁獲増は2006年の卓越年級が漁獲の主体であったため、2012年以降はこれら資源の減少に伴い漁獲量も減少し、近年は再び150～200トン前後で推移している。
- 資源水準は中位、動向は横ばい。
- 2018年の上越市場でのモード（FL）は23cm、佐渡市場では20cmであった。



5. 資源回復に関するコメント

- 網目2寸2分（6.7cm）以上としていた刺網の自主規制を、平成19年度から水産資源回復計画により、2寸3分（7.0cm）以上に引き上げた。
- 遊漁による釣獲が相当量あるが、正確な釣獲量が把握できないため、資源への影響についての評価が難しい。